

# 第5回JATAの道プロジェクト

## 宮古市や山田町など中心に総勢100人が現地踏査

JATAは10月26日と27日の両日、岩手県の太平洋沿岸地域で長距離自然歩道「みちのく潮風トレイル」で宮古市北部から中部にいたるルートを中心に、東北復興支援活動「JATAの道プロジェクト」を実施しました。JATAが2014年から取り組んでいる同プロジェクトは今年度で5回目を迎え、三陸を代表する景勝地のひとつである「浄土ヶ浜」、町が総力で観光復興まちづくりに取り組んでいる山田町、1960年代後半に人気を集めたNHKの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルと言われる蓬萊島などの視察を行っています。

### JATAから会員企業などの73人が参加

東北地方の太平洋沿岸地域のロングトレイルである「みちのく潮風トレイル」は、環境省が東日本大震災からの復興のシンボルとして、三陸復興国立公園内で整備しているもので、その全長は約900キロにも及びます。

JATAは2014年から震災発生10年となる2021年3月までの7年間にわたり、同トレイルを活用しながら観光による交流の活性化を図り、東北における地域経済の振興を図ることを目指して、

JATA会員会社が主体的に現地踏査を行うことで商品化につなげる「JATAの道プロジェクト」を実施してきました。

今年度は、JATA国内旅行推進委員長も務める坂巻伸昭JATA副会長を团长とする会員企業などの73人が活動を行ったほか、岩手県や環境省、地元自治体などの関係者34人も参加し、総勢100人を超える規模となりました。

10月26日と27日に実施された同プロジェクトでは、(1)宮古市の真崎・沼尻海岸、浄土ヶ浜展望台・潮吹穴の両区間でのトレイルコース体験ウォーキング、(2)みやこ浄土ヶ浜遊覧船の乗船や山田町体験プログラム、

蓬萊島の見学など岩手県太平洋沿岸地域を中心とした観光地の視察、(3)環境省・地元自治体・観光団体による観光資源などの紹介、(4)地元関係者との意見交換などが行われています。

### 浄土ヶ浜は宮古市を代表する景勝地

三陸復興国立公園の中心ともいえる浄土ヶ浜は、宮古市

を代表する景勝地でもあり、鋭く上がった白い流紋岩が林立し、その二つが異なった表情を見せて海岸を彩っています。

松の緑と岩肌の白海の群青とのコントラストは、天和年間(17世紀後半)に宮古山常安寺七世の霊鏡竜湖を「さながら極楽浄土のごとし」と感嘆させたと言われ、この言葉が地名の起源になったと言われるほどです。

今回のプロジェクトにおける視察でもハイライトとなった浄土ヶ浜については、参加者から「ビクターセンターは見えたええがあり、もっと積極的に案内しても良いのではないかと」浄土ヶ浜の全体を自分の足で歩いて把握し、最後に立ち寄るビクターセンターで知識を得る内容は、参加型ツアーとして良いのではないかと、いった感想が寄せられています。

また、真崎・沼尻海岸、浄土ヶ浜展望台・潮吹穴のトレイルコースについては、「手すりや階段がしっかり整備されており、高低差をあまり感じず歩くことができる」といった評価する声がかかれた一方で、今回歩いた区間だけでは「海や潮吹穴を間近に臨める景観は得難いが、それ以外の見どころや写真スポットが少ない印象を受けた」「歩く時間が少なく感じられ、浄土ヶ浜まで歩いても良いのではないかと」「個人のお客様に対しては送迎が問題」「入山口に簡単なマップの看板でもあればよい」「雨天や暑い時など、着替えの場所があると良い」といった工



10月26日に浄土ヶ浜パークホテルで開催された交流会では、宮古市の佐藤廣昭副市長(右上)、JATAの坂巻伸昭副会長(左上)、岩手県沿岸広域振興局の石川義晃局長(右下)、環境省自然環境局国立公園課の中尾文子課長(左下)が挨拶に立ち、佐藤副市長は「みちのく潮風トレイルを活用した観光振興がますます重要性を増している」と山本正徳市長によるメッセージを代読。坂巻副会長は「今回の活動を通じ、トレイルコースの魅力や観光素材の情報を発信し、一緒に地域を盛り上げたい」と決意を示しました。石川局長は「三陸防災復興プロジェクトにより沿岸全域で様々なイベントが用意されている」と紹介。中尾課長は「受入環境を整えており、一番必要な送客を是非お願いしたい」と訴えています。

# 復興支援の道 みちのく潮風トレイルを歩く

夫や改善の必要性を指摘する声もありました。

## 体験プログラムを積極的に商品化へ

東日本大震災に伴う津波で大きな被害を受けた山田町では、町をあげて官民による観光復興まちづくりが進められており、町民が山田町で体験できるさまざまなメニューを提供している体験プログラムも観光

復興の大きな柱と位置付けられています。

豊かな自然を活かした「海・山・自然」「食・ものづくり」「里くらし」「街震災ガイド」などのテーマで用意されている体験プログラムのうち、今回の視察では、参加者が「食・ものづくり」「街震災ガイド」のプログラムを体験しました。

「食・ものづくり」の体験プログラムについては、「牡蠣むき体験と昼食、物販の組み合わせは大変良く、商品化したい」「場所が荷捌き所というところで、雰囲気も含めて地元、港らしさが出て特別感があり、お客様も喜ぶ素材」「地元の方々と触れ合う体験となった。高齢者向けのツアー内容も考えていきたい」など、商品化に向けて積極的な感想が寄せられています。

また、「復興街歩き」についても、「タブレットが配布され、自分



今回のプロジェクトに参加した JATA 会員会社関係者などの皆さん



真崎～沿尻海岸の区間でのトレイルウォークや遊覧船での「たろくまへのパンの餌付け」などを体験

がある場所の震災前の風景と現在を見比べることができ、津波前後の変化がどれだけ大きかったかという点が非常にわかりやすい」「まち歩きの語り部の方のトークも上手く、商品価値が高いと思う」「震災語り部や体験プログラムは、教育旅行をはじめとした団体旅行向けのコンテンツとして大変有効であり、現地に来た満足感がある」と評価する声が多く、商品化の動きが期待されるといえます。

## 三陸鉄道「リアス線」再開を弾みに

東日本大震災で被災した後、運行が停止したままとなっている岩手県太平洋岸の J-R 山田線は、2019年3月から運転が再開される予定です。

宮古／釜石間の約55キロを結ぶ路線では、J-R 東日本が2018年度中に線路や駅舎を復旧させ、三陸鉄道に経営を移管して「リアス線」として列車が走ることになります。

今回のプロジェクト参加者からも、「三陸道の開通とも合わせて2019年度は話題を集めるので、縦断コースを計画したい」「受注型団体旅行での提案素材として、発



山田町では「いか徳利体験」に挑戦



震災遺構の「たろく観光ホテル」も視察しています

「具体的な内容はまだだが、三陸 DMO センターと協業して、エスコート商品に組み込めれば」など、新たな切り口やアプローチによる需要開発に前向きな姿勢が示されています。

「景勝地でのトレイル」だけでは、各地に点在する様々なトレイルとの差別化も難しいことから、「地域や震災との関わりをより深めた形でアピールする手法が必要ではないか」という指摘もあり、旅行会社にもこれまで以上の知恵と工夫が求められることになりそうです。

JATA としては、2014年からスタートしたプロジェクトを通じて、これまで積み重ねてきた地元との意見交換などにより地域への理解を深めています。今後旅行業界界ならではの復興支援の形を示していく方針です。